

児童教育を支援する
「博報財団」が、すぐれた
取り組みを顕彰する

第49回「博報賞」受賞

日本文化理解 教育部門

あわせて文部科学大臣賞受賞

文部科学大臣賞は、「博報賞」受賞者の中から
各部門1件まで、特に奨励に値する実践に贈られます。

新潟県 村上市立村上小学校

郷土の宝、村上大祭を
児童の手で再現する
ミニ村上大祭

新潟県の最北に位置し、かつて村上藩5万石の城下町として栄えた村上市。12月初旬、その村上市の伝統校の一つである村上市立村上小学校の体育館には、独特の節回りで歌う子どもたちの声が響いていく。

「へ三面川 毎年秋になると
鮭が海から 上ってくる」
毎年7月7日に開催されている村上大祭で歌われる村上甚句に倣い、3年生が作った「村小3年生じんく」の1節だ。訪れたこの日は、村上大祭の歴史や伝統を学んだ3年生がその成果を披露する「ミニ村上大祭」の本番だった。1年生、2年生、村上大祭保存会の方や保護者ら招待客の前で、堂々と発表する3年生は、皆、自信にあふれた表情を浮かべている。

村上大祭は江戸時代初期の1633(寛永10)年から行われている歴史ある祭り。村上伝統の漆塗り彫刻で飾られた「おしやぎり」と呼ばれる19台の屋台山車が町内を練り歩く様は圧巻だ。2018年には、「村上祭の屋台行事」として、国の重要無形民俗文化財に指定された。

「以前、1、2年生の生活科の授業の中で、お神輿を担いで楽しむ活動がありました。通常はお神輿なのですが、村上の子どもが楽しむのであれば、郷土が誇る『おしやぎり』を曳くのがふさわしいと考えたそうです。その後、3年生から始まる村上の歴史と文化を取り入れた総合的な学習として、子どもたちのアイデアも取り入れ、2005年から毎年『ミニ村上大祭』を開催してきたと聞いています。」
こう語るのは、自身も村上小学校出身で、村上大祭には毎年住民として参加している

という鈴木正美校長だ。昔は屋台と縁のある町内の男子だけが参加していたが、近年は女子や屋台を持たない町内からの参加もできるようになった。そこで、保存会の方を外部講師として招き、子どもたちに祭りの歴史やお神輿、甚句、獅子舞などの指導をしてもらい、さらに多くの人々に関わってもらってきた。こうした継続的な学習が、結果的に次世代の担い手を育てることにつながっている。

きな声で甚句を歌うのは、最初は恥ずかしかったけれど、どんどんリズムが体にしみ込んできた。「お父さんが獅子舞をやっているから、僕もやりたいと思っていた」と、高揚した表情で感想を口にしている。

「祭りは楽しいだけではありませぬ。準備に膨大な時間と労力を要します。だから子どもたちのつながりも深まるのです。『ミニ村上大祭』でも、面倒にも思える準備を通して、みんなで作る経験をし

てもらいたい。そうした体験を経ると、本物の大祭を見る目が格段に変わります。祭りを通して人々とのつながり、地域を大切にしようとする気持ちも高まりますね(鈴木校長)

地域の伝統を学んだ子どもたちが もたらす郷土の未来

さらに村上小学校では、4年生になると、鮭の回帰性に気づき世界で初めて鮭の増殖に成功した、村上市出身の青砥武平治の知恵に学び、地域の方の指導で名物の塩引き鮭作りを体験。5年生になった春には、孵化を見守った鮭の稚魚を放流する。

こうした学習を通して、子どもたちは自然との共生や伝統文化を継承している人々の想いに触れる。

また、5年生は、村上のよさを記したパンフレットを制作し、3月に開催される「町

屋の人形さま巡り」のイベントの際に配布。子どもたち自らが観光ボランティアを務める。そして6年生では、これまでの3年間で深めてきた郷土の知識を生かし、まちづくり協議会や市観光協会など行政と連携して村上の未来について考える。

「2年前、村上の人々にお城山として親しまれている、城跡のある臥牛山を観光資源として活用したい」というアイデアが当時の6年生から出され、市に提案する機会をいただきました。郷土の宝の一つですが、これまであまり光

が当てられてこなかったのです。実はこのときの子どもたちの提案が、2年の歳月を経て、今年、実現する予定です(鈴木校長)

段階を経て長期的に進められる村上小学校の総合的な学習は、地域の人々や行政と連携、協働しながら、ダイナミックに発展している。「村上小は、地域の学校であると同時に、地域も子どもたちの学校なのです」という鈴木校長の言葉は、手作り屋台を曳く子どもたちの輝く笑顔が証明していた。



「村上大祭は郷土の宝の一つです」と嬉しそうに語る鈴木正美校長。



4年生が手作りの塩引き鮭。添加物は一切使わず、伝統の製法を継承。



発表グループ、甚句グループ、獅子舞グループ、お囃子グループ、屋台グループに分かれて発表するミニ村上大祭。クライマックスは、児童手作りの「おしやぎり」で体育館を練り歩く。

学校が地域と連携、協働し、地域の文化を継承する担い手としての意識を育てる継続的な教育活動の推進

伝統ある村上大祭や鮭漁など、村上市の伝統文化を教科横断的に学びながら、郷土への愛着を育み、地域社会の次の担い手を育てる15年以上続く取り組みに、博報賞が贈られた。

推薦者 お祝いのことば

新潟県教育委員会

池田幸博 教育長

第49回博報賞日本文化理解教育部門並びに文部科学大臣賞の受賞、心よりお祝い申し上げます。地域の方々や保護者の御支援のもと、村上大祭や塩引き鮭等、地域の伝統や特産物に直接触れながら、体験活動に取り組んだ実績が高く評価されています。子どもたちは、体験を通して地域の人々の伝統文化に対する熱い思いを感じながら、地域への理解を深め、ふるさと村上への愛着や誇りとふるさとへの貢献意欲が高まったことでしょう。これからも、子どもたちが目を輝かせながら、生き生きと地域に学ぶ村上小学校の取り組みを楽しみにしています。

池田幸博 教育長